島を丸ごと博物館に
ー永続的持続可能な人と自然のルールづくり

黒潮実感センター設立準備委員会
代表　神田　優　　高知県

はじめに

かつて漁業で栄えた柏島も現在漁業不振と高齢化問題に直面しています。しかし、一方で柏島はその数日本一といわれる魚種の多さに加え、日本有数の規模を誇るサンゴ類の存在によって、いまや日本におけるダイビングのメッカとなりつつあります。多くの観光客が訪れるなかで、島に暮らす住民、特に漁業者の生活が大きく様変わりしようとしています。今後、島で暮らす漁業者とダイビング産業がいかに共存し、かつ、恵まれた自然環境をどう保全していくべきかが問われています。

黒潮実感センター設立準備委員会では、人と海の生物が共存する柏島周辺の海を「里海」としてとらえ、地場産業の振興のみを重視した消費型の観光地化を目指すのではなく、どうすれば柏島がいつまでも里海であり続けられるのか、人と自然の共存について柏島シンポジウムを開催し、ディスカッションを行いました。

シンポジウムでは、現在私たちが柏島に設立しようと計画している、海のフィールド・ミュージアムとしての黒潮実感センター（島全体を丸ごと自然の博物館にしようという構想）が、海洋研究と環境学習の拠点となると同時に、海の環境保全と地域振興にどう関わっていくか、新たな自然博物館の果たすべき役割についても論じました。

今回、公益信託タカラハーモニストファンドの助成をいただいたことで、柏島シンポジウムをはじめ、さまざまな活動を行うことができたことに心から感謝いたします。

お陰様で柏島シンポジウムをきっかけに地元住民が改めて身近な自然の重要さを認識し、人と自然、漁業者とダイバーが共存できるルールづくりを模索しはじめました。海洋研究・環境学習・環境保全・地域振興といった多岐にわたる分野の拠点として「黒潮実感センター」を必要とする声も次第にではありますが高まりつつあります。

地域振興のみを重視する姿勢が地域に根強い中、すぐに経済的価値を生まない当センターの考え方にはなかなか理解が得られにくいながらも、次の世代を担う子ども達への地域の自然を大切にする心を育てる環境教育の重要性をとくことは、山に苗木を植えるような地道な努力が必要とされます。しかし、長い期間かかっても苗木を育ててさえゆけば、必ずや芽が出て育つことを期待しつつ、この活動を続けていきたいと思います。

黒潮実感センターは「人と自然の共存」をスローガンに、センターを設立、運営していきたいと考えています。環境重視のフィールド・ミュージアムだからこそ、環境を守りながら永続的に利用していくための海のルール作りを行い、環境保全活動を続けていきたいと考えています。

最後にこれらの活動を陰になり日向になり、物心両面から支えて下さった、柴岡邦男大月町長、高知大学農学部栽培漁業学科の山岡耕作教授、大月町立柏島中学校の田中農三校長、大月町役場総務政策課の中平定男係長、笹木美和主事および、宿毛高校大月分校の中山香教諭に心より感謝申し上げます。

平成12年度活動実績

活動報告

1. 海洋セミナー大月およびシンポジウム

平成12年5月20日

第8回海洋セミナー大月

黒潮実感センター設立準備委員会主催

宝酒造協賛

於　：柏島公民館　19:00～22:00

参加者：71名

テーマ：「いつまで柏島？いつまでも柏島！」

講　師：東洋大学国際地域学部教授

池田　誠　氏

5月14日

RKC高知放送ラジオ橋本知事がパーソナリティを務める「大二郎’Sワールド」に出演

黒潮実感センターの紹介と6月開催予定の柏島・里海シンポの案内をする

6月10日

柏島シンポジウム

黒潮実感センター設立準備委員会主催

大月町共催

宝酒造株式会社・富士ゼロックス端数倶楽部・NHK高知放送局・RKC高知放送・KUTVテレビ高知・KSS高知さんさんテレビ・高知新聞社・朝日新聞社・毎日新聞社（高知支局）・読売新聞社・産経新聞社・共同通信社（高知支局）後援

於：柏島中学校体育館　13:00～17:00

参加者：約300名

テーマ：「里海・身近な自然とともに...　－環境保全型地域おこしを考える－」

1. 柏島中学校生徒発表：「島全体が博物館－環境教育から学んだこと－」

2. 基調講演：「地域社会と自然博物館－これからの自然博物館のあり方について－」

講　師：林　公義　氏（横須賀市自然博物館副館長）

3. パネルディスカッション：「環境保全型地域おこしを考える」

コーディネーター：池田　誠　氏（東洋大学教授）

パネリスト：橋本大二郎　氏（高知県知事）

立川　涼　氏（愛媛県環境創造センター所長）

林　公義　氏（横須賀市自然博物館副館長）

神田　優（黒潮実感センター設立準備委員会事務局長）

6月10日

愛媛南海放送で大月町と黒潮実感センターの紹介、柏島への初の修学旅行誘致の件が放送される

6月11日

柏島体験ツアー

主催以下同上

於：柏島　9:00～17:00

遊覧船による島巡り、遊歩道探索、グラスボートでのサンゴ礁観察、柏島の海の幸試食、スキューバーダイビング（橋本知事、柏島の海を実感するために体験ダイビングに挑戦）

参加者：約70名

6月11日

NHK高知放送で柏島シンポジウムの模様が放送される

6月12日

NHK高知ローカルニュース「とさ情報市」に神田が出演　柏島シンポジウムの模様について語る

6月23日

大阪ABC放送で柏島シンポジウム・体験ツアーの模様が放送される

平成13年3月5日

第9回　海洋セミナー大月

黒潮実感センター設立準備委員会主催

宝酒造協賛

於　：すくも湾漁協柏島支所19:30～21:30

参加者：71名

テーマ：「海で元気になった子どもたち」
講　師：三宅島アカコッコ館顧問
ジャックT.モイヤー氏
3月17、18日
四国魚類研究会開催
高知大学農学部・黒潮実感センター設立委員会共催
於　：大月町中央公民館
参加者：高知大、愛媛大、民間研究者ら70名

2. 環境教育

平成12年4月14日
京都伏見ロータリークラブ講演
テーマ:「海のフィールドミュージアム－黒潮実感センター設立に向けて－」
5月23日
西四国観光ネットワーク「ルーラルポケット」平成12年度総会及び情報交換会において講演
テーマ:「黒潮実感センター構想とこれからのヴィジョン」
於　：ホテルベルリーフ大月
参加者：33名
5月30日
修学旅行で来島した吹田市立青葉台中学校生に柏島での海の体験学習を行う（昨年12月に行った大阪の中学校での海の環境学習会の成果として、大月町初の修学旅行誘致につながる）
6月4日
大阪海遊館主催の海遊館友の会のイベントにおいて講演
テーマ:「覗いてみよう海の底－高知県柏島の海の生物たち－」
於　：大阪海遊館
6月14日
大月町教育委員会社会科部会で講師を務める
テーマ：「柏島の海や漁業についての学習」
於　：大月町立柏島小学校　15:00～17:00
参加者：教員8名
6月17日
大月町立弘見小学校において海の環境学習会
テーマ:「のぞいて見よう、海の底－大月の海の生きものたち－」
於　:大月町立弘見小学校　9:40～11:00（参観日）
参加者：全校児童130名及び父兄、教職員
6月21日
大月町立月灘中学校にて環境学習会
テーマ：「命の尊さと自然環境」
於　：月灘中学校　13:15～15:05
参加者：月灘中学校1年生及び教職員
6月27日
テーマ：「地元を再発見　大月町の海の魅力」
於　：大月エコロジーキャンプ場研修室
13:00～14:30
参加者：幡多地区保健会・養護教諭・保健主事・幡多地区の高校生保健委員50名
7月1日
須崎市立上分中学校において海の環境学習講演会
於　：須崎市立上分中学校10:30～12:00
参加者：全校生徒47名　父兄11名
7月10日
大月町立中央小学校にて海の環境学習会
於　：中央小学校　13:35～15:15
参加者：中央小学校3－6年生36名及び教職員5名
7月11日
海の生きもの採集観察会
於　：柏島旧橋下付近の磯及び砂浜
参加者：柏島小学校全校児童26名
7月12,13日
大月町立柏島中学校の体験環境学習の講師を務める
体験学習：「黒尊・四万十川から学ぶ」

テーマ：「川の生きものの生態について」
於：西土佐村四万十楽舎・四万十川・黒尊川
参加者：柏島中学校全校生徒15名
7月16日
大月の海の生きもの現地採集学習会
於　：樫西海岸タイドプール　13:00～14:30
参加者：大月町立周防形小学校全校児童及び父兄、教職員
7月17日
柏島中学校において海の体験学習会
サンゴ礁の広がる柏島後の浜でシュノーケリングをして生き物の観察を行う
於　：柏島後の浜　10:00～15:00
参加者：柏島中学校全校生徒15名及び教職員
7月25日
大月の夢と教育を語る会
於　：大月町役場　14:00～16:20
8月2日
海の環境学習会
テーマ：「大月の海の生き物たち」
於　：大月町農村改善センター
参加者：岡山県吉井町（大月町の姉妹都市）の児童140名
9月8日
大月エコロジースクール（自然体験学習）で講師を務める
於　：柏島（シュノーケリング・グラスボート・島巡り体験）
参加者：宿毛高校大月分校　1年生40名、JICA（国際研修員）
10月25日
海の環境学習会出張講演
テーマ：「宿毛湾の環境について」
於　：宿毛中学校　多目的ホール　9:30～11:00
参加者：1年生105名
10月30日
3町（大月町・大方町・佐賀町）教育委員会合同研修会にて講演
テーマ：「地元を教材にした環境学習について」
於　：大月町役場大会議室　13:40～15:00
参加者：大月町教育委員会・大方町教育委員会・佐賀町教育委員会
10月31日
柏島中学校環境学習会（体験学習）1
テーマ：「私たちのくらしと水とのかかわり－柏島の水にまつわる今昔－」
於　：柏島中学校・島内水源地、下水処理場、下水の流れ込む湾内
13:00～16:00
参加者：柏島中学校全校生徒15名
11月7日
柏島中学校環境学習会（体験学習）2
テーマ：「私たちのくらしと水とのかかわり－廃油石鹸作り－」
於：柏島中学校
13:00～14:00
参加者：柏島中学校全校生徒15名
11月12日
下ノ加江小学校PTA文化講演会出張講演
テーマ：「のぞいてみよう、海の底－高知の海の生きものたち－」
於　：下ノ加江小学校　体育館　10:20～11:20
参加者：下ノ加江小学校全校児童76名、保護者
12月2日
柏島中学校環境学習会3
テーマ：「私たちのくらしと水とのかかわり－地区へ配信する通信作り－」
於：柏島中学校
13:00～16:00
参加者：柏島中学校全校生徒15名
12月3日
柏島野草、野鳥観察会

於　：柏島島内
参加者：高知ナチュラリストメーリングリストメンバー、地元住民ら10名
講　師：細川公子（自然観察指導員）、西村公志（日本野鳥の会）ら
12月13日
窪川町シルバー大学環境セミナー出張講演
テーマ：「地元の自然を再発見－海の環境学習会－」
於　：窪川町農村環境改善センター多目的ホール　13:30～15:00
平成13年１月18日
黒潮福祉看護専門学校講義
テーマ：「土佐の海の環境学・その保全と利用について」
於　：黒潮福祉看護専門学校　10:40～12:20
参加者：２年生34名
１月25日
環境学習出張講演
テーマ：「海の環境学習会・大月町柏島の海の生き物たち」
於　：伊野町立公民館２階研修室　10:00～12:00
参加者：伊野町連合婦人会会員50名
１月30日
大月の夢と教育を語る会　中学生との意見交換会
於　：大月町役場２階大会議室　14:00～16:00
２月４日
高知県自然観察指導員連絡会出張講演
テーマ：「大月町柏島の海の環境と黒潮実感センター構想について」
於　：牧野植物園牧野富太郎記念館　アトリエ実習室　13:30～15:00
３月３・４日
体験学習フォーラム
体験学習フォーラム実行委員会、高知県子ども課共催
テーマ：「遊びのなかに学びがいっぱい」
於　：高知市中央公園
柏島の海の生き物たちをパネルや自作ビデオを使って紹介
また、三宅島のジャックT．モイヤー氏を招き、三宅島の噴火の様子などのパネルも展示、三宅島災害復興基金「アカコッコ基金」への呼びかけを行う
３月５日
柏島中学校最後の環境学習会
テーマ：「海で元気になった子どもたち」
於　：柏島中学校音楽室
参加者：柏島中学校全校生徒15名、柏島小学校（３－６年生）
講師：ジャックT．モイヤー氏
３月８日
漁業婦人部を対象に廃油石鹸作りを指導する
３月16日
大月の夢と教育を語る会
於：大月町役場２階大会議室　14:00～16:00

3. 海のルール作りへの取り組み（アドバイザーとして参加）

平成12年３月28日
大月スクーバダイビング事業組合の再生化に向け、組織を発展的に解消
４月11日
大月スクーバダイビング事業組合管理運営委員会発足
役員：８名　およびアドバイザー：中平定男（大月町役場総務政策課）、神田　優（黒潮実感センター設立委員会）
平成12年４月23日
大月スクーバダイビング事業組合再編成会議
４月27日

柏島漁業組合長・理事らで組織された海面利用協議会と大月スクーバダイビング事業組合管理運営委員会のメンバーで海のルール作りに関する初の会合を行う

5月24日

大月スクーバダイビング事業組合再編成会議

6月15日

大月スクーバダイビング事業組合再編成会議

6月28日

ダイバーを地元漁民の収益につなげる取り組みの一環として、観光イカ釣り部会を発足させ意見交換を行う

7月27日、8月4日、8月29日、10月2日、11月29日、12月18日

大月スクーバダイビング事業組合再編成会議

12月22日

ダイビング事業組合設立総会

4. 研究活動

平成12年5月1日

高知大との共同研究「柏島プロジェクト」の検討会議

於　：高知大学農学部山岡研究室

メンバー：山岡耕作（高知大農学部教授）、深見公雄（高知大農学部教授）、新保輝幸（高知大人文学部助教授）、友野哲彦（高知大人文学部助教授）、婁小波（東京水産大水産学部助教授）、三浦大介（高知大人文学部講師）、神田　優（黒潮実感センター設立委員会事務局長・高知大学農学部非常勤講師）

8月23日

「柏島プロジェクト」の件で大月町長と会談、大月町における環境保全条例案作成について高知大三浦氏、友野氏、神田

9月28日

高知大学との共同研究の調査フィールドとしての柏島後の浜を、調査ポイントとして開放してもらうよう柏島漁協組合長に要請する

平成13年3月6日

黒潮が柏島沿岸域に及ぼす影響調査（海洋水質調査）

「柏島プロジェクト」研究の一環

3月23日

アオリイカの増殖に関する研究

人工海草のイカ産卵礁としての有効性を探る

3月27日

柏島の魚類相および水質調査

調査区設置作業

「柏島プロジェクト」研究の一環

3月27日

柏島サンゴ礁域の継続調査のためのリーフチェックについての説明会を行う

対象：ダイビング事業組合員

5. 環境保全活動

9月14・15日

サンゴ食巻き貝（ヒメシロレイシガイダマシ）の駆除活動

於：勤崎周辺サンゴ礁

参加者：大月町パークボランティア、高知海洋高校、高知大学、地元ダイビングサービス関係者ら22名

両日でヒメシロレイシガイダマシ4646個9.85kg、卵塊の付着したサンゴ　4.75kg駆除

9月18日

柏島海浜環境調査実施

10月14日

柏島ビーチクリンナップ2000開催

主　催：大月ダイビング事業組合

共　催：黒潮実感センター設立委員会・柏島漁協・柏島地区

後　援：PADI　JAPAN

6. 助成金授与および表彰

6月1日

TaKaRaハーモニストファンドより活動助成金（50万円）の贈呈を受ける

6月10日

富士ゼロックス端数倶楽部より活動助成金（20万円）の贈呈を受ける

11月25日

第3回朝日海とのふれあい賞　海への貢献部門　準賞授賞

於　：朝日新聞東京本社　浜離宮ホール

平成13年3月12日

公益信託こうちNPO地域社会づくりファンドから平成13年度分の助成金50万円を受ける

漁業とダイビング共存がカギ

海の創世記 新時代の潮流 2

柏島を海洋レジャー拠点に

島発展 無限の可能性

周囲四キロ、面積一平方キロの小島に、十二店のダイビングショップが並ぶ。半数がこの二年間で開店した。サンゴ群落が残る県西端の大月町柏島。ダイビング雑誌に取り上げられるなど、都会のダイバーから脚光を浴び、海洋レジャー拠点として無限大の可能性を秘めるが、世紀の転換期に超えなければならない「壁」があった。ダイバーと、〝先住者〟である漁師との調和をどう図っていくかだ。

ショップを経営しインストラクターを務める長尾陸平さん(59)は年間三百日、海に入る。全確認数の四分の一を占めるベテラン。高知市で二十年間営業したが、島に魅せられ一九九四年に拠点を移した。「魚の種類、サンゴの密度がダントツだから」と〝移住〟の理由を語る。

黒潮が島の南を流れ、生態系が温帯と熱帯にまたがるため、高知大の調査で確認された魚類は九百種以上。国内のポイントはサンゴの群落が見られる後浜の一部。ピーク時には柴岡邦男町長ら町関係者、住民で構成、二〇〇三年中のスタートを目指す。「両者がいがみ合い、島の人気だけが上昇する現状は町にとって不幸。ダイバーの存在を地元にうまく生かす仕組みを作る必要がある」と神田さんは力説する。

関西から訪れる。

しかし、ダイバー側は、海を仕事場とする漁師、漁協とのあつれきをどう解消するか、という難題を抱えていた。

「黒潮実感センター設立委員会」を立ち上げた。メンバーは柴岡邦男町長ら町関係者、住民で構成、二〇〇三年中のスタートを目指す。「両者がいがみ合い、島の人気だけが上昇する現状は町にとって不幸。ダイバーの存在を地元にうまく生かす仕組みを作る必要がある」と神田さんは力説する。

長尾さんらダイビング関係者は神田さんらを交え、昨年暮れに新たな事業組合を発足させた。町の協力もあって柏島漁協も話し合いに応じる姿勢で、交渉の道筋は作られた格好。「共存共栄はできますよ。そのために組合を作ったのだから」

長期間、組合設立の準備に携わってきた長尾さんの思いは熱い。「ダイビング客にイカ釣り漁船にも乗ってもらえば地元の漁師も潤う」。神田さんも新時代の島の繁栄プランを練る。

県海洋漁政課の平田益良雄課長(56)は「海に囲まれた県にとって、漁業とダイビング業との調和は二十一世紀の海洋戦略のカギ」と指摘する。島での取り組みが新世紀レジャーの発展を占う試金石となる。

（祝迫　博）

同町のダイビング関係者が九五年に事業組合を発足させ、漁協とのルール作りを進めようとしたが、溝は埋まらないまま解散した。

事態打開に乗り出したのが高知大非常勤講師の神田優さん(34)。島全体を自然観察会やダイビングのできる〝体験型博物館〟にしようと昨夏、

柏島を愛し、漁協との共存共栄の道を探る長尾さん（大月町柏島で）

メモ

県内のスキューバダイビングの主な潜水スポットは、大月町のほか、宿毛、土佐清水、土佐市、中土佐町など。ダイビング関係者が組合を設立して、漁協側との協定を結んだのは、宿毛市沖ノ島だけだが、市外のダイバーとのルール作りは不十分で、課題が残る。

H12.5.31　高知新聞

トビウオに「わぉー」と歓声を上げる青山台中の修学旅行生ら
（大月町の柏島沖）

県外から初の修学旅行生

大月町
柏島

環境学習で本県学ぶ

修学旅行で環境について学習しようと大阪府吹田市青山台四丁目の市立青山台中学校（熊谷年夫校長）の三年生八十六人が三十日、幡多郡大月町の柏島を訪れた。大月町役場によると、宿泊以外の目的で県外の修学旅行生が同町を訪問したのは初めて。

大阪府吹田市の中学

島や海中の自然満喫

同町が昨年、京阪神の中学校に修学旅行誘致を働き掛けたところ、学校ぐるみで環境学習に取り組んでいる同校が名乗りを上げた。そこで昨年十二月に、柏島の黒潮実感センター設立準備委員会で活動している神田優さん（三）らが同校へ出向き、「出張環境学習会」と題して講義を行い、生徒たちとの交流が始まった。

生徒は事前に、柏島をはじめ本県の自然や人々の暮らしについてグループで学習。本やインターネットなどで調べ、時には神田さんに問い合わせたりしながら、旅行に備えていた。

前日に幡多路入りした一行は三十日、大方町でのホエールウオッチング、四万十川でのカヌー、そして柏島と、三つのグループに分かれて体験学習を行った。

柏島ではチャーター船やグラスボートに乗り込み、島や海中の自然を満喫。生徒らは「大阪の海とはちゃう」「また来てみたい」とすっかり感激し、トビウオが滑空するたびに「わぉー」と歓声が上がっていた。また、港の岸壁で釣りをするグループもあった。

引率していた青山台中の熊谷校長は「大阪ではなかなか接することのできない大自然の中でいい環境体験学習ができたと思う」と話していた。

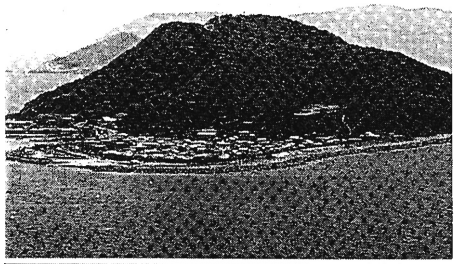
H12. 6. 8　朝日新聞

自然博物館構想の柏島

人と海共生考える

10日「里海」巡りシンポ

環境保全を考え、島と住民が安心して生活できる地域おこしなどを目指す大月町柏島の黒潮実感センター設立準備委員会は十日午後一時から、町立柏島中学校体育館で「柏島シンポジウム」を開く＝写真。準備委は、島全体を丸ごと博物館にする構想を進めており、シンポでは「里海　身近な自然とともに―環境保全型地域おこしを考える」をテーマに、自然博物館のあり方や役割などを話し合う。十一日午前九時からは、遊覧船による周辺の島巡りやスキューバダイビング、柏島体験ツアーなども計画されている。



柏島は周囲約四キロ。かつては漁業で栄えたが、住民の高齢化で漁業不振が続く。しかし、島沿岸では熱帯産と温帯産の魚が混生し、約二千種の魚が確認されている。サンゴは日本有数の規模で群生し、ダイバーらの人気を集める。

シンポでは、人と海の生物が共存する柏島周辺の海を「里海」ととらえ、人と自然がどうしたら共存できるかを話し合う。シンポに先立って、柏島中の生徒が「島を教材に環境学習で学んだこと」を報告。横須賀自然・人文博物館の林公義副館長が「地域社会と自然博物館」と題して基調講演する。

パネルディスカッションは、池田誠・東洋大国際地域学部教授の司会で、林副館長▽橋本大二郎知事▽立川涼・愛媛県環境創造センター所長（前高知大学長）▽神田優・黒潮実感センター設立準備委員会事務局長の四人がパネリストを務める。参加無料。

柏島体験ツアーは有料で、遊覧船による島巡り（大人二千円、子ども千円）▽遊歩道（観音岩から猿公園）探索（三百円）▽グラスボート（大人千円、子ども五百円）▽スキューバダイビング（初心者一万五千円、経験者一万二千円）がある。

問い合わせは、準備委（0880・62・8022）へ。

H12. 6. 8　高知新聞

人と自然　共存考えよう

10、11日に柏島シンポ

「里海は」テーマ

幡多郡大月町柏島の自然の豊かさを知り、人と自然との共存について学ぼうと十、十一日の両日、「柏島シンポジウム」が柏島中学校体育館で開かれる。海洋生物の研究機関設立に取り組んでいる「黒潮実感センター設立準備委員会」（会長＝柴岡邦男大月町長）の主催。

シンポジウムの全体テーマは「里海・身近な自然とともに…」。初日は午後一時に開幕。柏島中生徒による環境学習成果の発表の後、神奈川県横須賀市立自然・人文博物館の林公義副館長が基調講演「地域社会と自然博物館」を行う。二時五十分からは橋本大二郎知事、立川涼愛媛県環境創造センター所長（前高知大学長）、神田優黒潮実感センター設立準備委事務局長が加わりパネル討議を行う。コーディネーターは池田誠東洋大学教授。

十一日は「柏島体験ツアー」と題し、スキューバダイビング（体験をはじめ、遊覧船による島巡り、ゲラスボートでサンゴや魚の観察などを行う予定。神田事務局長は「海洋環境保全と地域振興に、われわれ人間がどうかかわっていくべきかを考えるいい機会です。ぜひ参加してほしい」と話している。シンポジウムは入場無料。体験ツアーはメニューに応じて有料。問い合わせは同準備委（0880・62・8025）。

H12.6.12　高知新聞

知事 スキューバで海満喫

大月町 柏島シンポで体験

知事がスキューバダイビング初体験――。幡多郡大月町柏島で開かれている「柏島シンポジウム」は十一日、島内周辺を探訪する「体験ツアー」が行われ、橋本大二郎知事はスキューバダイビングに挑戦し、さんご礁が広がる美しい海を満喫した。

海洋生物の研究拠点施設設立を目指す「黒潮実感センター設立準備委員会」の主催。同準備委は、柏島周辺の海を「里海」として感じ、人と自然との共生を図ろうと、二日間のシンポジウムを企画。初日はパネルディスカッションなどが行われた。

この日は小雨が降るあいにくの天候だったが、グラスボート、遊覧船などによる自然探訪に、県内外から約七十人が参加。知事もスキューバダイビングに挑戦した。

海に潜るのは初体験という知事は、ウエットスーツに着替えた後、同準備委の神田優事務局長から指導を受け、船上では緊張した表情だったが、ダイビングポイントに着くと「よし、いきます」と海中にドボン。鼻から息を抜く呼吸法に戸惑っていた知事も徐々に慣れ、水深約十㍍の海中に潜っていった。

約三十分の水中散歩を終えて、船上に戻った知事は「数え切れないほどの魚がいた。水族館では味わえない素晴らしい景色だった」と絶賛。「この環境を保全しながら地域振興につなげていくには、やはりルールが必要だろう」と真剣に語り、「いい経験をしたよ」とにっこり。久々の「大ちゃんスマイル」を振りまいていた。

潜る際の説明を受ける橋本知事（大月町柏島）

柏島の海〈素晴らしい財産〉

林公義（横須賀市自然・人文博物館）副館長

講演要旨

柏島中学校で十日に行われた林公義横須賀市自然・人文博物館副館長の基調講演要旨は次の通り。

博物館の使命には①展示して観客に見せる②本物の品を集めてくる③収集したものを大事に保管する④価値付けするための研究を行う―の四つの大きな柱がある。多くの人は、展示して見せることが博物館の仕事のほとんどだと考えがちだが、これらのことが一つ欠けても仕事が成り立たないことを知ってほしいし、博物館側も努力しなければならない。

博物館を訪ねるとさまざまな疑問が解決できる。そんな便利な施設であるように地域との対話が求められている。しかし、日本の博物館の歴史はまだ百年ほど。各地に箱物的な博物館ができても、なかなか生かされていない。

近年いわれている「自然博物館」の長所は、自然そのものがその場所でそのまま生きていること。もちろん、これを守ることが「自然博物館」には求められるわけだ。

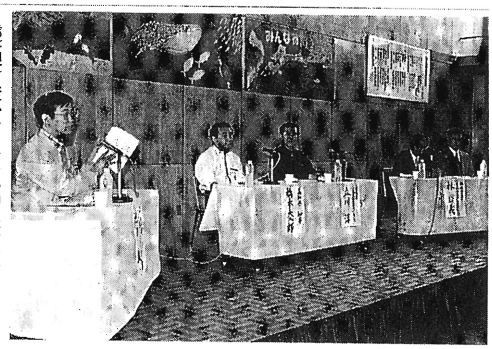
皆さんが住んでいる柏島の海は素晴らしい財産だ。この財産は海だけでなく、この島の緑と地形が長い歴史の中ではぐくんできた。

地元の人が学芸員に

そういった意味でも、町や自然環境そのものが博物館だね。黒潮実感センターという拠点が完成しても、それをどう運営するかは皆さんの意識にかかっている。

一人ひとりがこの自然博物館の学芸員として役割を果たし、「里海」の環境保全ができる島にしてほしいと思う。

基調講演を行う林公義横須賀市自然・人文博物館副館長



橋本知事（左から2人目）や神田事務局長（右端）らが参加して開かれた柏島シンポジウムのパネルディスカッション＝大月町柏島で

自然を生かして柏島を博物館に

シンポに300人参加

環境保全や地域おこしなどをテーマにした「柏島シンポジウム」が十日、大月町柏島の町立柏島中学校体育館で、県内外から約三百人が参加して開かれた。豊かな自然を生かしながら、島全体を「博物館」として活用し、地域を活性化する方法などについて、関係者が意見を交わした。

池田誠・東洋大教授が司会を務め、パネリストとして、林公義・横須賀市自然・人文博物館副館長▽橋本大二郎知事▽立川涼・愛媛県環境創造センター所長（前高知大学長）▽神田優・黒潮実感センター設立準備委員会事務局長の四人が話し合った。

橋本知事は「高知市から車で約四時間。この不便さが大月町に柏島という宝物を残した。四万十川の保全条例を制定するのと同様に、島民の生活を生かした島利用のルールづくりが不可欠」と話した。

立川所長は、環境ホルモンの研究者の立場から、「地球汚染の防止策は廃棄物を減らすことだ。柏島にとっても、十年、二十年先の島を想定し、みんなで考えていくことが大切」と述べた。

神田事務局長は、島内に設立する黒潮実感センターの構想について「地域振興の一翼を担い、環境保全の拠点にしたい」と説明した。

シンポに先立って基調講演した林副館長は「柏島の自然は貯金通帳を持っているのと同じこと。周囲にはサンゴという利息もついている。どう運用していくか、みんなで考えてほしい」と話した。

H12.6.11　朝日新聞

H12.6.11　高知新聞

柏島は「里海」

自然との共生考える

知事ら招きシンポジウム

大月町

幡多郡大月町柏島周辺の海を「里海」ととらえ、人と自然の共生を考えるシンポジウムが同町の柏島中学校体育館で開かれ（写真）、町民ら約三百人が参加した。柏島周辺の海洋生物の研究拠点機関設立を目指す「黒潮実感センター設立準備委員会」の主催。

柏島中生徒の環境学習発表でスタート。生徒は「さんご礁の海を守るために、清掃活動や他校との交流を行いたい」と柏島の豊かな自然について報告した。続いて林公義横須賀市自然・人文博物館副館長が「地域と自然の共生を考えるシンポジウムが同町の柏島中学校体育館で開かれ（写真）、町民ら約三百人が参加した。柏島周辺の海洋生物の研究拠点機関設立を目指す「黒潮実感センター設立準備委員会」の主催。

柏島中生徒の環境学習発表でスタート。生徒は「さんご礁の海を守るために、清掃活動や他校との交流を行いたい」と柏島の豊かな自然について報告した。続いて林公義横須賀市自然・人文博物館副館長が「地域と自然の共生を考えるシンポジウム」と題して講演。「島の環境を地域が守り、博物館として運営してほしい」と提言した。

引き続き行われたパネルディスカッションには、林副館長のほか橋本大二郎知事、前高知大学長の立川涼愛媛県環境創造センター所長、神田優同準備委事務局長が参加。池田誠東洋大学教授をコーディネーターに、環境保全型地域おこしについて話し合い、「自然博物館という考え方はこれからの時代に即している」「訪れた人たちにも環境保全ルールを守ってもらう。それが一番の課題」などの期待や意見が出された。

最後に同中二年の島崎里奈さんと増田光さんから「里海宣言」が出され、柏島の海と自然の暮らしを守ることを参加者全員で誓い合った。

十一日は「柏島体験ツアー」と題し、スキューバダイビング体験やグラスボート、遊覧船などによる柏島の自然探訪が行われる。

ニュース五十二次

地域わいど

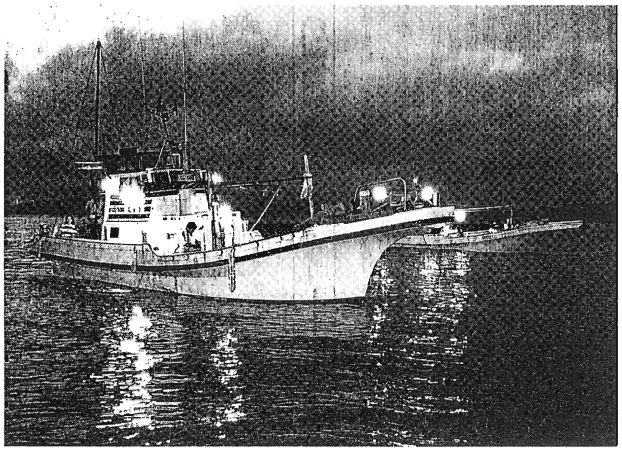
ダイビング業者と地元漁協

観光イカ釣りで協力

大月町・柏島

夏本番を迎え、幡多郡大月町柏島は、京阪神方面や四国内からスキューバダイビング目的の若者たちでにぎわっている。そんな中、数年前から摩擦が続いていたダイビング業者と漁業者との間で、関係修復に向けた動きが見えてきた。今月から始まった観光イカ釣り漁がそれ。互いに協力して新たな観光資源開拓を狙っている。実験的取り組みだが、関係者は「これを第一歩に、柏島周辺の海のルールづくりに結びつけたい」と期待している。

小型船に乗ってイカ釣り。日没直前がスタートだ（写真はいずれも大月町柏島）



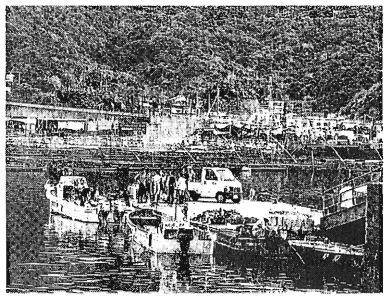
漁業者との摩擦解消へ

約一千種ともいわれる魚種の多さと透明度の高い海が柏島の魅力。テレビ、雑誌などにも数多く取り上げられ、全国でも有数のダイビングスポットになった。この流れに乗り、五業者によるダイビング事業組合ができたのは七年のこと。漁業者とのトラブルを避け、円滑な海面利用の促進が主目的だった。町などもこの動きに呼応。船舶安全運航の観点から、県の助成を受けて、ダイビングポイントに浮きブイを設置した。

しかし、地元漁業者とダイビング業者との溝が徐々に浮かび上がってきた。漁業者は「海は自分の生活の場」と考えたのに対し、ダイビング業者は「海はみんなのもの」という考え方。相反する考え方が、漁場への侵入などのトラブルを生んだ。同組合は、二年前に一度組織の立て直しを図ったものの、漁協などとの話し合いはまとまらなかった。

それでも、地元住民をはじめ、漁業者やダイビング組合員の中から、強固な中心的組織になってほしいとか金を落とさないといわれる若者に、新しいレジャーを提供し、なおかつ地域にも利益が回ってくる。その点を説明して、小型漁船を夕方から出してもらう協力態勢を得た。

七月、港から十分足らずの沖合で星空を見上げながらの行う観光イカ釣り漁が始まった。時間は日没三十分前から午後九時まで。柏島内の民宿やダイビングショップにポスターを張り、呼び掛けている。体験した客にも「釣れた時のピクッとした感触が面白い」と好評。同委は夏休み中、さらなる周知活動を行う予定だ。これには漁協の角隆憲組合長は「試みはいいと思う。地域おこしへ進めていくためにも、安全管理は徹底していきたい」と話す。



シーズンを迎え、ダイバーは次々と海水ボイントに向かう

海のルールづくりへ一歩

ためごとし三月末に、ダイビング事業組合は発展的に解散。引き続き八人の委員が選出され、「大月スクーバダイビング組合管理運営委員会」という形で再出発した。

イカ釣らないか

まず同委は、漁協と話し合いの場を持つことを考えた。大月町職員らも間に入り、柏島漁協との話し合いが行われた。福留輝政委員長はこう語る。

「ダイビング禁止場所の設定や潜水届の提出などを確認し、関係修復へ一歩踏み出しました。その中でこちらは新たな観光事業の協力をお願いしたんです」

同委から提案したのは夕涼みがてら行うイカ釣り漁だ。狙いは昼間にダイビングを楽しんだ若者客。民宿とダイビングショップにしか交流の場にしたいという点で、関係者の意見は一致している。ダイビング業者と漁業者とのルールづくりも利益が回ってくる。その点を説明して、小型漁船を夕方から出してもらう協力態勢を得た。

（宿毛支局・西森征司）

環境保全も併せて

柏島で海洋生物の研究機関「黒潮実感センター」設立に向けて活動を行っている神田優さんは「環境保全面では、柏島だけでなく周辺の海も含めた視点が必要」と指摘する。一カ所のさんご礁にダイバーが集中して荒れてしまうことを避けるため、大月町、司地区などもふくめた潜水ポイントのローテーション化を提案している。

福留委員長も「われわれも新たなスタートを切ったばかり。観光事業を含め、模索していきよる途中です。ルールづくりを目指して漁業者と話せる環境をもっと整えていかねば」と現状を話す。潜水ポイントはもちろん、来訪者の駐車場所確保、ごみの問題など課題は尽きない。

柏島に来た若者たちが、住民の生活に触れ、さまざまなことを感じ取る。そんな交流の場にしたいという点で、関係者の意見は一致している。ダイビング業者と漁業者とのルールづくりには、言い換えれば財産である「里海」をどう守っていくかということだ。業者の取り組みに期待がかかる。

（宿毛支局・西森征司）

平成12.10.18　朝日新聞（高知版）

「柏島学」確立へ 高知大など調査

自然博物館構想で若手グループ

海洋生物の生態など研究

経済的価値算出や環境条例制定検討

「島をまるごと自然博物館に」という構想が進む大月町の柏島を舞台に、環境法制や観光振興、海洋生物の生態について、高知大の若手研究者らのグループが、法学、経済学、生物学の領域から多面的に研究するプロジェクトに取り組んでいる。研究者たちは現地調査を重ね、豊かな自然環境に恵まれた島が持つ経済的価値を算出するとともに、環境を守るための条例案づくりなども検討中だ。「柏島学」と銘打ち、来春には高知大で講義を始めたいとしている。

周囲約四キロ、人口約六百人の柏島は、沿岸漁業で栄えたが、高齢化と過疎化が進む。一方、周辺の海には、日本有数のサンゴ礁が広がり、黒潮の影響で熱帯魚も多いことから、ダイバーや釣り客ら年間約三万人が訪れる。「博物館構想」は、こうした自然条件などを生かし、島全体を体験型のミュージアムにしようと、地元住民や大学の研究者らでつくる黒潮実感センター設立委員会が具体化を図っている。

そんな島をテーマに「柏島学」の確立を目指すプロジェクト名は「柏島水域における海中生物の生物多様性の保全と活用――地域振興の視点から」。文部省の科学研究費助成を受け、高知大や神奈川大、東京水産大から参加した約十人が、それぞれの専門分野ごとに研究を続けている。

高知大人文学部講師の三浦大介さん(三三)=行政法=は九月末、柴岡邦夫・大月町長から、環境保護に関する基本方針を黒潮実感センター設立委と作成するよう依頼された。

近年、島を訪れる観光客が増えるに連れ、地元住民とのトラブルや、ごみ、騒音などの問題が発生。こうした状況に対し、豊かな環境を守り、島民と観光客がともに快適に過ごせるようなルールづくりが求められている。これまで海砂利採取などの問題に取り組んでいた三浦さんは「河川の保護条例などはあるが、島全体の環境保全のための法整備は、ほかに例がない」と方針作りに知恵をしぼる。

高知大人文学部助教授の友野哲彦さん(三四)=環境経済学=は、町役場などの資料に目を通し、漁業や観光の関係者から聞き取り調査を進める。友野さんは「島の漁業は高齢化と後継者不足が進んでいるが、漁獲高では衰退しているわけではない」と見て、「レジャー産業が漁業に取って代わるのではなく、いかにして共存していくかが課題」と指摘する。このほかの研究者は、ダイビングによる魚やサンゴなどの生態調査などに取り組む。

プロジェクト班は、今回の研究成果をもとに、研究者が交代で講師を務め、リレー形式の講義も開く計画だ。三浦さんは「大学が地域に貢献できるか」が問われている」と話している。

平成12.　9.16　朝日新聞（高知版）

巻き貝駆除し サンゴ守ろう

大月 ダイバーら20人

地元の美しいサンゴ礁を守ろうと、大月町一切の勤崎海岸で十五日、サンゴを食べる巻き貝の駆除作業があった。同町柏島の黒潮実感センターが呼びかけ、高知大の学生や高知海洋高校のダイビング部員、地元のダイバーら約二十人が参加した。

同町周辺の海中には、イシサンゴ類など全国でも有数の美しいサンゴ礁が広がるが、近年、サンゴ虫を食べる巻き貝ヒメシロレイシガイダマシが大量繁殖し、サンゴが白く変色するなどの被害が拡大。一年弱で全滅した海域もあるという。

この日、ダイバーらは三人一組で海に潜り、サンゴを傷つけないようにしながら、サンゴの表面に付着したヒメシロレイシガイダマシやその卵をピンセットなどで採取。一時間ほどで三千七百三十七個を集めた。

参加した高知海洋高校三年の浜端一君(一八)は「海は透明で魚がいっぱいいたが、サンゴはほとんど真っ白だった」と残念そう。同センターの神田優さん(三三)は「サンゴは『海の森』ともいうべき貴重な存在。海中の生態系がこれ以上損なわれないよう、定期的に駆除していきたい」と話した。

平成12.10.12　高知新聞

柏島をきれいにしよう

大月町　14日にクリーン作戦

お魚セミナー 交流会も予定

幡多郡大月町柏島の「大月ズクーバダイビング事業組合管理運営委員会」（福留輝政委員長）は、十四日に行う海中、海岸清掃「柏島ビーチクリーンナップ2000」の参加者を募集している。

当日は午前九時に柏島漁協前に集合。柏島漁港付近を中心とした海中を清掃、午後は海岸部を中心に清掃活動や体験ダイビングなどを行う。夕方からは黒潮実感センターの神田優さんを講師にした「お魚セミナー」や交流会を開く。参加者には特製Tシャツを贈る。

参加費は一万二千円（ダイビング料、昼食代込み）。セミナー、交流会参加には別に男性三千円、女性三千五百円が必要。問い合わせはアクアス（0880・76・0100）か大月ダイビングサービス（同76・0176）。

漁協と共存共栄へ

ダイビング関係者ら中旬に事業組合設立

大月

漁協との共存共栄に向けて、組合発足の準備を進めるスキューバダイビング関係者ら（29日夜、大月町柏島で）

スキューバダイビングの盛んな大月町で、ダイビング関係者らが集まり十二月中旬に事業組合を発足させる。これまで同町では、ダイバーと漁業者とのトラブルが相次ぎ、話し合いの"窓口"がない状態が続いていたが、ダイバー側は組合発足を機に、水面利用のルール作りを進め、共存共栄を図りたい方針。二十九日夜には同町柏島で、組合加入を予定する約二十人が集まり、最終調整を行った。

話し合いの窓口に

同町では現在、ダイビングショップが十六店あり、一九九五年前から約三倍に増加。今後も新たに二店がオープン予定で、活性化への有力な観光産業として成長している。

一方で、ダイバーが漁協の設置した魚礁に潜り、漁獲の妨げとなるなど、「漁場が荒らされる」などとする漁協側とのトラブルが後を絶たなかったことから、一九九五年一月にはショップや漁船業者らが事業組合を発足させ、ルール作りを進めようとしたが、約束を破るダイバーがいるなど、話し合いは決裂。九七年三月には組合改組を行い、再交渉する動きも見られたが、結局、両者の溝は埋まらないまま組合は解散。九八年から今年三月まで両者の間で、正式な話し合いは一度も行われなかった。

しかしダイバー人口の急激な増加を背景に、双方の関係者から海の利用に関するルール作りを求める声が相次ぎ、今年三月、旧組合の解散と同時に、新たな組織作りを進める八人の運理運営委員がショップ関係者らから選ばれ、準備を開始。今回は町と大学関係者が仲介役として、漁協との調整を図ってきた。

二十九日の会合では、新組織の事業方針などについて協議。組合の目的を「スキューバダイビング業従事者の生活向上と地域住民の生活、環境面の保全」とする規約などについて合意し、十二月中旬に総会を開くことになった。

調整を進めてきた同町総務政策課の中平定弘・地域振興係長は「今後は海面利用に関する漁協との協定作りやダイバーによる環境保全活動なども進めていくことになる」と説明。会合に来賓として参加した同町柏島漁協組合の亀尾鶴蔵組合長は「海を生業にしている私たちにとって、漁場の提供には慎重な態度を取らざるを得ないが、事業組合が漁協との話し合いの窓口になれば、お互い仲良くやっていくための約束事をいろいろと決めていきたい」と話していた。

平成12. 12. 24　朝日新聞（高知版）

2000年 支社局が選ぶ

5大ニュース

①

大月町

❶宿毛・大月の漁協合併
大月町と宿毛市の16漁協が来年1月から合併し、新漁協に。

❷町議選で3新人当選
9月に行われた町議選で、3人の新人候補が当選を果たした。

❸周遊観光船が就航
大堂海岸や柏島、足摺岬などを回る周遊観光船が4月末から運航開始。

❹柏島で「里海」シンポ
柏島周辺の海を「里海」ととらえ、考えるシンポジウムが6月に開かれた。

❺古満目で3棟全焼
4月末、古満目で民家3棟を全焼する火災があり、1人が亡くなった。

豊かな自然環境守ろう

共存共栄へ向け

スクーバ組合設立

大月で潜水マナーのルール作り

ダイビング、漁業、旅館3者が連携

大月町柏島周辺の豊かな自然環境を守り、観光客誘致を進めていこうと、町内のダイビング業者、漁業者、旅館経営者が二十二日夜、地元の公民館で「大月スクーバダイビング事業組合」の設立総会を開いた。全国有数の美しいサンゴ礁に魅せられ、柏島には年間二万人を超すダイバーが訪れるが、ごみ問題などでダイバーと漁業者の間でトラブルが絶えなかった。組合は、関係者の共存共栄に向けて協力していく。

組合員は約五十人で、活動の大きな柱は環境保全の推進。漁業者にとっても、ダイビング業者にとっても、「豊かな海が最大の資源。海を汚したらどの業者の生活も成り立たない」との共通認識に立ち、互いに協力して海の環境を守ることで一致した。

今後、組合の「環境保全部」を中心に、組合外の漁協とも協議し、潜水禁止区域の設定や潜水マナーの確立といったルールづくり、環境学習の徹底などを図っていく。また、「事業部」がダイバーの受け皿になり、統一したPR活動などを実施する。

福留耀政組合長は「大月の海を守るには三者の協力が不可欠。ダイバーを気持ちよく迎え入れる態勢を整え、地元の活性化も図っていきたい」と話している。

柏島体験ツアー
平成12年6月11日
橋本知事もダイビングに初挑戦！

柏島体験ツアー
平成12年6月11日
柴岡町長もグラスボートでサンゴ礁の観察！

柏島体験ツアー
平成12年6月11日
漁協婦人部も協力して地元の郷土料理作り（すり身の天ぷら・さつま汁・キビナゴの干物・ところてんなどなど）➡特産品の開発につなげる

第９回　海洋セミナー大月開催
「海で元気になった子ども達」
於：すくも湾漁協柏島支所
平成13年３月５日
ジャック T. モイヤー氏
71名参加

柏島中学校最後の環境学習会
「海で元気になった子ども達」
平成13年３月５日
ジャック T. モイヤー氏
柏島中学校、小学校生徒児童

（平成13年３月で柏島中学校は廃校となりました）

自分達が描いたパネルを前に柏島中学校のみんなとモイヤーさんを囲んで